# 明石の史跡（７６）松平直之と鶉

明石藩第１２代の殿様（松平直之）は、鶉の飼育を趣味としていたようである。現在の本松寺の東側、太寺にいたる場所にあった林を、囲い込み、毎夜、役人をして、この地に撒き餌をして、鶉をあつめた。この場所は東長寺谷といった。なかでも美声の鶉を捕獲させて、籠養したそうだ。当時は、この鶉の飼育が、大変流行し、美声の持ち主には、千金の値がついたとつたえられる（『明石名勝古事談第２本』５９頁）。

鶉を飼鳥とすることは、近世以前には、あまりなかったようである。ところが、慶長から寛永にかけて、「鶉合」（うずらあわせ＝飼養しているウズラを持ち寄って、その鳴き声の優劣を競う遊び＝広辞苑）が流行する（「嬉遊笑覧」『古事類苑動物部』７２７－８頁）。それから１世紀以上も経過した、明和・安永の頃にも、ふたたび「鶉合」が盛んになり、諸侯のひとり、松平直之もはまったようだ。

鶉は、甲州・信州・下野のものが上。摂津・播磨・美濃のがそれに次ぐという。その肉は、無毒とはいうものの、菌子（きのこ）と合わせ食すると、痔を発症する（『本朝食鑑２』２３４頁）。

松平直之は、天明４年（１７８４）１０月１０日に、病身の父直泰（なおひろ）を継承。藩領内も２年前の大不作のダメージが残る。全国的には、夏から米価高騰。年末には、奥羽を中心に死者１０万人を数える（遠藤元男著『近世生活史年表』）。明石藩内も無傷ではなかった。

翌天明５年（１７８５）５月は、畿内・諸国の旱魃。また美囊郡より行き倒れの報告があった。作柄は好転しない（『累年覚書集要』１６３頁）。天明６年（１７８６）４月、不食になやまされ、直之は逝去（同書１６４頁）。美声をもたらす鶉は、きび・粟・稗・米を飼料とする（「喚子鳥下」『古事類苑動物部』７２７頁）。それでも、東長寺谷の林へ、役人を送りつづけたのだろうか。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

東東長寺谷